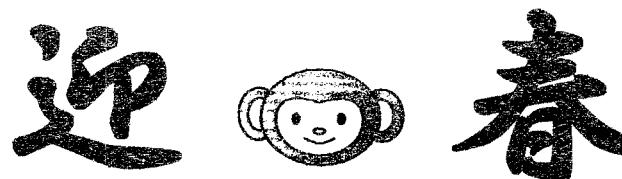


ホット・ホット・越谷

発行責任者：高橋 正久

〒343-0838 越谷市蒲生三丁目七番七号 TEL 048-985-4826 FAX 048-989-2397

E-mail osamuchan@ae.wakwak.com URL http://www.ae.wakwak.com/~osamuchan



新年あけましておめでとうございます

越谷市にある「花田苑」は、日本人の心が薰るゆったりとした風情ある景観で、安らぎとぬくもりが息づく伝統に培われた日本文化といわれています。

庭園には、能楽堂や茶室があり、池に向かって開放的な造りの茶室は、庭とのつながりを大切にしています。静寂な広がりを見せるその世界は、庭園の茶亭としての趣があります。茶室の裏には梅をはじめとして、松・桜楓など園全体で約2,000本もの木が植えられ、より一層の風情を高めます。

新しい風

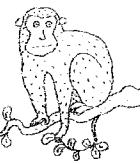
その意味で、議員の大きな仕事の一つである一般質問は、大切で必要なことであり、常に問題意識、関心を持ち、情報収集、調査をする姿勢を持ち続けることである。さて、二年目を迎える今年さらに自らを飛躍させていくために、何が求められるだろうか。その一つとして、改めて政治とは何かを学ぶことではないか。理念、見識を持ち、信義、道義をわきまえること。柔軟で謙虚であることではないだろうか。

昨年は、選舉に明け選舉で終わった年であった。四月の越谷市議選では、伊藤さんを始め八人の新人議員が誕生し、越谷に新しい風を入れ、世代交代を進めました。その、新人議員達も三回の議会（六月・九月・十二月）を経験し、それぞれ成長していくことが、その内容を聞いても感じられた。

自分はもとよりのこと、先輩議員、同僚達の質問の仕方、内容、説得力、話し方等、一つ一つを身に付けながら議員としての力を豊かにしていくことであろう。

これまで、二年目を迎える今年さらに自らを飛躍させていくために、何が求められるだろうか。その一つとして、改めて政治とは何かを学ぶことではないか。理念、見識を持ち、信義、道義をわきまえること。柔軟で謙虚であることではないだろうか。

伊藤おさむ市政報告会 サンシティで開催！



4月の統一地方選挙において、多くの皆様のご支援をいただき越谷市議会議員になった伊藤さんは、市民の様々なニーズを市政に反映すべく、この半年間精力的に活動してまいりました。

その、伊藤さんの初めての市政報告会が、越谷サンシティで行なわれました。報告会には、後援会の人たちを始め、地域の人々、国会議員、地方議員の仲間たちも駆けつけ、伊藤さんの政治信条や活動について理解と励ましをしてくれました。

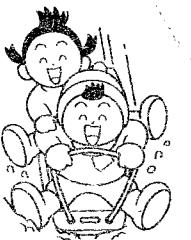
一部では、後援会の松沢さんの司会で始まり、広瀬さんの開会挨拶のあと、伊藤さんの市政報告となりました。伊藤さんは、この間の議会（6月、9月）で一般質問をした問題意識と内容の話の概略と、初めて触れた議会、行政について自分の感想やエピソードを話しました。既に、ホット・ホット越谷でも報告しているように、伊藤さんは、新人議員ではありますが、6月議会では選挙期間中地域の皆さんに訴えてきた、子供や高齢者に安全、安心、やさしいまちづくり、地域の活力等について質問し、先輩議員からも激励される内容と堂々たる話しを致しました。9月議会でも、郡山市での行政視察で学んだ「防災」について、越谷市の「防災計画」が、市民に十分周知されていないことや、地形、地質、地盤の状況から、液状化や地盤沈下の被害が予測されることに対する、調査結果と対策について質問しました。また、初めて議場の演壇にたって、改めて感じたことは、議場には段差があり、車イスでは通れないこと、身近なところでバリアフリー化が進んでいないことを実感したことや、再質問がなかなか噛み合わないのは、予想されない答弁に対する瞬時の対応と準備が出来ていないことであり、経験不足を感じたと話しました。三浦さんの閉会の挨拶で一部が終わり、懇親会に移りました。

2部の懇親会では、上村さんの司会ではじまり、中野さんの開会の挨拶、樋村市議による乾杯の音頭のあと、来賓の挨拶があり、今回の総選挙で激戦の末、比例当選した今井衆議院議員から、総選挙での協力の感謝と、伊藤さんの議会での活躍は、新生自民党への期待として注目していると話

されました。つづいて、松沢県議をはじめ、伊藤さんが参加している、地方政治改革ネットの仲間である、矢澤八潮市議、石村草加市議、朝田八潮市議、加納宮代町議の人たちが、伊藤さんへの期待と温かいエールを送ってくれました。

暫らくの懇談中、大正琴の演奏があり、リズミカルで迫力のある音色に酔いしれながら、主催者のお礼の言葉と、土田氏による閉会の挨拶と関東三本締めで、第1回目の伊藤おさむ市政報告会を終わりました。





地域づくりは人づくり！

地区センター化と地域からのまちづくり！

今回は、「生涯学習」「地域コミュニティ」「地域福祉」「防災救援」の4つの機能を併せ持つ市内最初の大型公民館として、平成10年に開設された蒲生公民館を訪ね、立澤館長にいろいろお話しを聞いてきました。

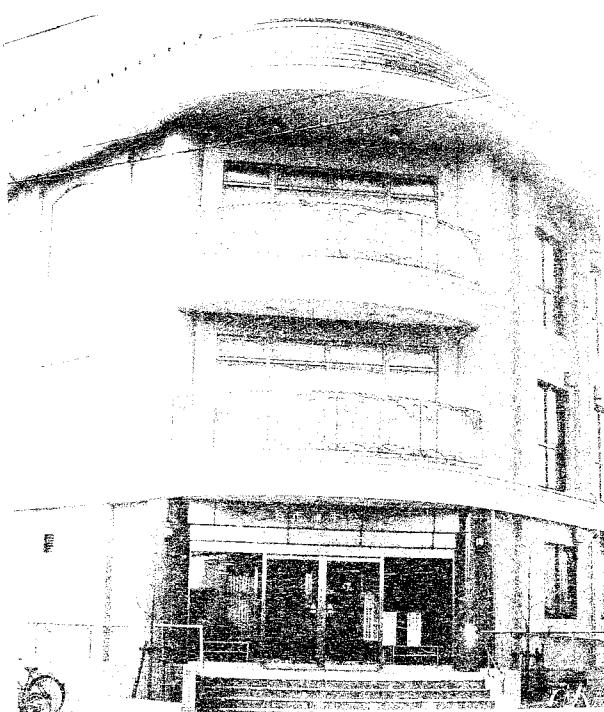
前回は、川柳公民館に伺い「子供遊び探検」のお話を聞いてきましたが、今回それとは違った角度から蒲生公民館に伺ったのは、12月議会での伊藤さん的一般質問に理由がありました。

それは、先の総選挙の投票率が埼玉県は全国ワーストNO1であったことについて、行政や議会は真剣に考え、対応を検討すべきではないかという質問をしたことからありました。その具体的な場として、地域の自治振興、コミュニティーを担っている公民館こそが、活動の軸になれるし機能を持っていると考えられたからです。

立澤館長は、たしかに戦後地方自治の歩みの中で、政治、憲法、自治、人権等の啓発、啓蒙活動について、公民館が一定の役割を担ってきたことは事実であり、最近はそのようなテーマから離れたものになっている現実は認められるし、今回の低投票率に対する対応を検討していくことが求められていることに理解を示しました。しかし、最近の住民ニーズの多様化、非政治化傾向もあって難しい問題であるといいます。例えば、先般行なった「人権」についての講演会も、講師やビデオや内容はとても良かったけれど、参加者を集めると苦労する現実があったといいます。

現在、公民館が取り組んでいることの柱は、平成16年度から実施されることになっている「地区センター化」で、館長はその話を熱く語ってくれました。

既に、ご承知かと思いますが、「地区センター化」とは、主な機能として、①地区のまちづくり計画の推進及びコミュニティー活動の支援②各種行政サービス（住民票、戸籍謄本、抄本、印鑑登録証明等）③年末年始、祝日以外は開館（行政サービスを除く）④公民館の生涯学習、地域コミュニティー、地域福祉、防災救援の4機能。そして、各種団体との連携・協力を促進すること、とあります。館長が熱く語ったことは、地区センターが目指す本来の目的は、行政機能の利便性やサービスという側面はあるが、これまでの行政と住民との関係性の見直しが大事な視点であるといいます。つまり、従来の行政依存型ではない、住民が自主的、積極的にまちづくりに関わり、自己決定、自己責任を果たしていく中で、地区別予算の導入を契機に自分達の知恵や協働を通して作り出していくようなものにしたい。そこには、分権化時代を迎える行政と住民の新しい関係づくり、地域の様々な知恵やパワーを生かした人材作りと、まちづくりへの思いが込められていました。



～バリアフリー検証～No.8

今回は、越谷市ではかなり古い会の一つで、障害者も健常者も一緒に考え方行動する「わらじの会」の山下さんにお話しを聞いてきました。

昭和54年に、知的障害児と肢体不自由児の養護学校設置義務が法制化され、各県に養護学校の設置が進められました（その結果、越谷市に養護学校ができた）。「わらじの会」は、昭和53年から埼玉県東部地域の障害をもつ人ともたない人が共に生きるネットワークとして活動してきました。会の中心になった障害児の親たちはかつて「総合養護学校」設立に向けた活動をしてきた人が多く、自分たちの養護学校づくりの運動が具体化するにしたがって、障害のある子どもたちが地域から引き離されるようになってきたことにショックを受け、一から出直そうと決めた人たちでした。したがって、その活動の内容はハコモノづくりよりも、障害をもつた人が、地域に出て行くことや、地域の人との出会いを作っていくことに重点が置かれました。そのことを通じて、自分たちも含めた地域社会がもつ偏見、目線、感覚を変えていく文化づくりをめざしたのでした。と語ってくれました。具体的な話を紹介すると、障害者がまちに出ることによって、まちの仕組みを知ることになる。それは、健常者には日常的な風景として感じているものが、全く別な世界として見えてくることがあります。例えば、車椅子で電車に乗れば当時の改札口は通れない。駅の階段を仲間の人たちが何人も手を貸して登り下りする。バスに乗っても同じような現実にぶつかる。公園では、バイク避けの柵があって入れない。しかし、これらのことと実際に経験しながら、手助けをする健常者も手伝い方を伝えていく知恵をつけていくことになります。

その手伝い方のお話で、面白いことを聞きました。障害者が、車椅子で電車に乗る場合、通常は4人の手助けがいるそうです（階段が広いし空間がある）。しかし、バスでは4人も人が同時に乗れません。そんな時、テコの原理を利用すると2人の手助けですむそうです。それは、車イスの持ち手と車輪を持ち上げ、車の車輪を利用し回転させて乗せるそうです。これらの経験を通じ、鉄道会社や行政を交えて話し合いの場をつくり、少しずつ今日のバリアフリー化の道を作つてきましたが、それでも、完全なバリアフリー化には時間がかかるようです。

「わらじの会」の年間行事には、クリスマスの会・障害者と健常者の夏合宿・交流バザーなどがあります。同時に、毎日の生活問題があり、障害の度合いによって、在宅介護や施設介護の相談事が多いといいます。交流バザーで目指していることは、健常者と障害者との交流で理解を深めることで、そのことにより、市民のボランティア参加が増加しているといいます。

お話の最後に、とても感動的な話をしてくれました。重度の障害（目、耳、言葉、身体）を持った人が「わらじの会」に来て、初めて外に出て、地域に出会い交流し、手話を覚え、様々な人とコミュニケーションをするようになり、家族も地域の人たちもこれまでの接し方や考え方を変えたといいます。

山下さんが、これまでの活動を通して考え、作り上げようとしている障害者の社会進出、健常者の意識改革、社会の文化を変えることが、力強く裏打ちされていることを実感いたしました。

